改訂天理教祝詞集

271
48

特18
623

改訂 天理教祝詞集目次

主神教祖祭祀の部

一、春季大祭祝詞……一頁
二、秋季大祭祝詞……三
三、月並祭祝詞……六
四、教祖祭祝詞……七
五、教會開筵式祝詞……九
六、主神假殿遷座祝詞……一〇
七、教祖神靈假殿遷座祝詞……一二
八、主神新殿遷座祝詞……一三
九、教祖神靈新殿遷座祝詞……一五
一〇、主神鎭座祝詞……一六
二、教祖神靈鎭座祝詞……一九

大正
1.10.14.
内務

二、信徒入社式祝詞……二一
三、同　誓詞……二三
四、信徒朝夕神拜祝詞……二三

恒例祝祭の部

五、一月一日祭祝詞……二四
六、元始祭祝詞……二六
七、孝明天皇御祭日祝詞……二八
八、孝明天皇御陵遙拜詞……三〇
九、祈年祭祝詞……三〇
一〇、紀元節祝詞……三二
一一、春季皇靈祭祝詞（秋季皇靈祭祝詞これに倣ふ）……三四
一二、神武天皇祭日祝詞……三五
一三、神武天皇御陵遙拜詞……三六
一四、大祓祝詞……三七
一五、神嘗祭日祝詞……三八
一六、神嘗祭遙拜詞……三九
一七、天長節祝詞……四〇
一八、新嘗祭祝詞……四一
一九、除夜祭祝詞……四三

臨時祭祀の部

二〇、祓祝詞……四四
二一、地鎮祭祝詞……四四
二二、柱立祭祝詞……四五
二三、上棟祭祝詞……四七
二四、大殿祭祝詞……四八
二五、祈雨祝詞……五〇

三六、祈晴祝詞……五一頁
三七、除蝗祝詞……五二
三八、除疫祝詞……五四
三九、道路開鑿起工式祝詞……五五
四〇、道路開通式祝詞……五七
四一、架橋起工式祝詞……五八
四二、架橋落成式祝詞……五九
四三、開校式祝詞……六一
四四、祈旅行安全祝詞……六三
四五、祈海上安全祝詞……六四
四六、祈漁獵祝詞……六五
四七、諸祈願報賽祝詞……六六
四八、誕生式祝詞……六七
四九、命名式祝詞……六八

五〇、初詣祝詞……六九
五一、成年式祝詞……七〇
五二、婚姻式祝詞……七一

葬儀靈祭の部

五三、遷靈詞……七三
五四、鎭靈詞……七三
五五、發葬詞……七四
五六、誄詞……七六
五七、埋祭詞……七八
五八、葬後靈祭詞……八三
五九、十日祭詞……八三
六〇、五十日祭詞（百日祭詞これに倣ふ）……八四
六一、壹年祭詞……八五

六二、五年祭詞（十年祭詞これに倣ふ）……八七
六三、改祭詞……八八
六四、遠祖祭詞……八九
六五、信徒合祀祭詞……九〇
六六、信徒合靈祭詞……九二

附錄

一、秋季大祭祝詞……一
二、御教祖、改葬申告祭詞……四
三、御教祖改葬新御墓地祭詞……五
四、大婚滿二十五年奉祝祭祝詞……一〇
五、征清軍戰勝祈禱詞……一三
六、神道管長子爵稻葉正邦柩前祭詞……一五
七、管長養父母廿年祭詞……二三
八、飯降贈大教正大人誄詞……二五
九、卅七八年戰役戰病死者弔慰祭詞……二八
一〇、本教獨立奉告祭祝詞……三六
二、假教殿釿始式祝詞……四二
三、管長病氣平癒奉謝祭祝詞……四三
三、大教殿新築起工式祝詞……四六
一四、同工事長奏上祝詞……四八

目次終

改訂

天理教祝詞集

主神教祖祭祀の部

一、春季大祭祝詞

天地の廣く大く、深く厚く、世を幸へ人を惠み給ふ、掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み〳〵も白さく、毎歳の例のまに〳〵、我が教の教師又信徒等諸、群鳥の打ち群れ來て、大前に參集ひて、今日しも春の御祭典仕へ奉りて、稱辭竟へ奉らくは、大神の廣く厚き大靈德によりて、天皇の大御代を、天壤の共無窮に、萬世一系に、齋ひ奉り護り奉りて、大八洲の國に、荒き波の打ち寄する事なく、暴き風の吹き

起つ事なく、靜御代の安御代と守り幸へ給ひ、我が教の教師信徒諸は言はまくも更なり、天下の公民に、食物衣物住家等を始めて、悉に足らはぬ事なく、缺くる事なく惠み寄さし給ふ、廣き厚き高き尊き恩賚を、常に辱み奉り、恐み奉るが故に、大祭典仕へ奉りて、神恩に報い給り、神靈を慰め奉らまくと、献つる御酒御食種々の物を、平けく安けく聞し食し諸ひ給ひて、今より後も、浦安國の名も灼く守り幸へ給ひ、又我が教の信徒諸は、教師の直く正しき心以て說き示し訓へ諭す事を、聞くが任悟り得て、身を修め、家を齊へ、君に忠實に、親に順に、眞心盡さむ

は更なり、總べて人とある道を履み行はしめ給ひ、程々に身を立てしめ給ひて、國を富し、民を福へ、外つ國々との交際も、日に異に厚く、月々に深く、皇國の光をば、日月の隈なきが如ぐ輝き亘らしめ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き拔きて、恐み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

二、秋季大祭祝詞

久方の天の極なく、荒金の地の涯なく、廣く大きく、深き厚き大靈德もて、世を知し食す、掛けまくも畏き、天理大神の大前に、齋まはり清まはり愼み敬

ひて白さく、歳毎の例として、春と秋とに大神の御祭仕へ奉りて、稜威の御霊を仰ぎ奉り、御幸を乞ひ祈み奉り來しを、今年も春の御祭は仕へ奉り終へて、今ははや秋の御祭仕へ奉るべき時になりにたれば、我が教の教師信徒等諸、群鳥の打ち群れ來て、紅葉の赤き心を大前に捧げて、今日しも稱辭竟へ奉らくは、大神の恩頼によりて、天皇の大御代を、天壌の共無窮に、萬世一系に齋ひ奉り護り奉りて、大八洲の國に荒き波の打ち寄する事なく、暴き風の吹き起つ事なく、靜御代の安御代と守り幸へ給ひ、我が教の教師信徒等諸は言はまくも更なり、天下

の公民に、食物衣物住家を始めて、悉に足はぬ事なく、缺くる事なく惠み寄さし給ふ、廣き厚き高き貴き恩賚を常に辱み奉り、恐み奉るが故に、御祭仕へ奉りて神恩に報い奉り、神靈を慰め奉らまくと、献る御酒御食種々の物を、平けく安けく聞し食し受け給ひて、今より後も、浦安國の名も灼く、守り幸へ給ひ、又我が教の信徒諸は、教師の說き示し訓へ諭す事を、聞くが任悟り得て、身を修め、家を齊へ、君に忠實に、親に孝順に、總べて人とある道を履み行はしめ給ひ、程々に身を立てしめ給ひて國を富し、民を福へ、外國々との交際も、日に異に厚く、月々に深

く、天皇の御稜威を日月の隈なきが如く輝き亘らしめ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き抜きて、恐み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

三、月並祭祝詞

掛けまくも畏き、天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、今日しも月次の御祭仕へ奉ると、献る御酒御食種々の物を、安幣帛の足幣帛と、大神の御心に平けく安けく諾ひ聞し食して、天皇の大御代を手長の大御代の、茂大御代と守り幸へ奉り給ひ、堅磐に常磐に立ち榮ゑ座さしめ給ひて、皇子等、皇族等、百官の人等、天下四方の國の公民殊には、我が教の信徒諸〳〵が家にも身にも災禍無く、平けく安けく、子孫の八十續五十橿八桑枝の如く、むくさかに榮ゑしめ給ひ、夜の守日の守に守り惠み幸へ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも祈ひ願ぎ奉らくと白す。

四、教祖祭祝詞

高く貴き天理大神の大稜威を背に負ひ、憂き瀬に落つる蒼生を助け救はむ大き御惠を御心に湛へて、これの現世に生れ出で給ひ、世間の人を天理の

まに〳〵教へ導かむと、此の御教を立て給ひ起し
またひし我が教祖眞道彌廣言知女命の御前に白
さく御祖の命い、廣く厚き御心のまに〳〵、世の人
を惠み給ひ、我が教を布き弘らしめ給ふが故に、こ
れの御教に入り立つ徒の、月々年々に增り行くを、
朝に夕に、夜に日に、悅び奉り辱み奉りて在れども、
今日はも、殊に毎歲の例の靈社祭の日にしあれば、
御酒御食種々の物を献りて御前を齋き奉らくを、
平けく安けく聞し食して、今より後も、此の道を長
へに守り幸へ給ひ、世の人を彌廣に彌遠に教へ導
かしめ給へと、恐み〳〵も請ひ祈み奉らくと白す。

五、教會開筵式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某信徒諸を
率て、愼み敬ひ恐み恐みも白さく、大神の、奇しく妙
なる大御威德を仰ぎ奉り、慕ひ奉りて、四方八方よ
り、嚴の御靈を蒙らまくと參來集ひて、朝夕に大神
の大前を齋ひ祭るが故に、此の教會を設けて、今日
開筵の式を執り行ふにも。故新に神床を設け備
へて、大神の御靈を齋ひ鎭め坐せ奉りて、御祭の禮
代と大野の原に生ふる物は、甘菜辛菜、靑海原に住
む物は、鰭の廣物鰭の狹物、御酒御食種々の物を、横

山の如く置き足はして、御祭仕へ奉らくを、平けく安けく聞し食して、此の教會にいより集ふ人々を、禍日の禍事なく、安く穏に御祭麗しく仕へ奉らしめ給ひ、又他人々にも、大神の御靈幸ひ給ひ、次々に教の道に入り立ちて、尊き御威德を蒙らしめ給ひ天下四方の國を、可美國の浦安の國と成さしめ給ひ、大神の御幸を遍からしめ給へと、畏み畏みも乞ひ祈み奉らくと白す。

六、主神假殿遷座祝詞

此の處を嚴の眞屋と齋み清めて、今日の御祭仕へ奉ると畏み畏みも白さく、此度、大神の千代の鎭處と、正殿造り仕へ奉らむとして、此の假殿に遷し奉る狀を、平けく安けく聞し食して、御祭仕へ奉る人々が手のまがひ足のまがひあらむをば、神直日大直日に見直し聞き直し給ひて、大前に奉る豐御酒豐御食海河山野の種々の物を、安幣帛の足幣帛と聞し食して、大正殿造り畢へむ間、此の處に鎭り坐して、教師を始めて、信徒諸を守り給ひ幸へ給ひ、又大神の御靈のふゆによりて、築き立つる大正殿を、大土の底つ石根の、常磐に堅磐に搖ぎなく、速に造り畢へしめ給へと、鵜じもの頸根突き貫きて、恐

み恐みも白す。

七、教祖神靈假殿遷座祝詞

我が教の御祖神と仰ぎ奉る、眞道彌廣言知女命の御前に、何某慎み敬ひて白さく、汝が命の嚴の御靈のふゆによりて、天の下四方國、到る處に御教の弘ごりて、大神の御幸を請ひ祈み奉る者の多に成り行く中に、此の教師信徒諸の人々、此度教の御祖命の御殿造り仕へ奉るとして今日を生日の足日と選び定めて、遷座の式仕へ奉らくと、御前に奉る宇豆の幣帛を、平けく安けく聞し食し諸ひ給ひて、此

の處に大座しまさむ間も、教の事に御靈幸ひ給ひて、彌益に御教を盛ならしめ給へと、慎み敬ひ恐み恐みも白す。

八、主神新殿遷座祝詞

此の新床を拂ひ清めて、齋ひ鎭め奉る、掛けまくも畏き我が大き教の本つ神と坐す、天理大神の大前を敬ひ慎みて白さく、此の地を、下つ石根の限り掘り固めて、齋柱立て、天の御蔭日の御蔭と、大正殿造り仕へ奉り、此度其の業畢へて、今日の生日の足日に遷座の御祭仕へ奉るとして、大前に献げ奉る物

は、青海原に住む物は、鰭の廣物鰭の狹物、大野の原に生ふる物は、甘菜辛菜に至るまで、御酒は甕の上高知、甕の腹滿て並べて、雜物を横山の如く積み置きて、献るうづの幣帛を、安幣帛の足幣帛と、平けく安けく聞し食して、此れの大正殿を千代萬代の鎮處と御稜威彌高々に、天皇の大御代を、手長の大御代の茂大御代と幸へ奉り給ひ、吾が教に入り立てる人々をば、八十禍日の禍事なく守り幸へ給ひて、此の大き教を、青雲の靄く極み、白雲の墜り座向伏す限り、秋津島根の内は更なり、雲居なす遙き外國までも布き弘らしめ給へと、恐み恐みも白す。

九、教祖神靈新殿遷座祝詞

我が教の御祖の命の御前に白さく、先つ頃より、新殿造り仕へ奉らむと、工匠等日にけに勤め勞きければ、夙く其の事成し終へて、最も莊嚴に造り奉り竟へぬ。故、今日の生日の足日に、遷座の御祭仕へ奉るとして、海河山野の雜々の物を供へ奉りて嚴の御靈を齋ひ祭りて、御前に白す事の由を、平けく安けく聞し食して大き御教を日にけに盛ならしめ給ひ、教師信徒諸をば、夜の守日の守に守り幸へ給ひ、彌遠に彌長に御祭美しく仕へ奉らしめ給へと、

恐み恐みも白す。

一〇、主神鎮座祝詞

天の壁立つ極み、國の退き立つ限り見霽し坐して、天地四方に大御稜威の到らぬくまなき、掛けまくもあやに恐き天理大神の大前に、何某慎み敬ひ恐み恐みも白さく、大神い、天地の初の時より、國土人獸草木に至るまで、有とある種々の物を成し出で給ひ、暑寒の時候を違へず、雨風の時節を過たず、生きとし生ける物の命を保ち長らへしめ給ひ、父子兄弟の道をさへ定め給ひて、萬の物みな其の處を

しめ給ひ、殊に吾が豐葦原瑞穗の國を、外國に優れる安國の可美國と御靈幸ひ給ひて、皇孫尊に、此の御國を万千秋の長五百秋に、浦安の國と平けく知し食せと事依さし給ひき。斯れば、皇御國の大御國風は、他國には立ち勝りて、萬の御政事寛に言擧せぬ國にし有れど、三栗の中つ御代より、外國の道渡り來て人事繁く成り行き、御政事種々に分れて、人の心も亂るゝ狀になりにたり。然はあれども尊き大神の御稜威は爭で隱れむ。吾が教の御祖命斯の世に生れ出で給ひ、大神の御稜威を說き諭し、人の道の踐みて行くべき程々を訓へ誨し給ひければ、

世の人も正しき神の道を悟り、大御國の大御國風をも辨へ知り、我が大き御教は日にけに弘り、月毎に盛に成り行きて、今は教師信徒萬の數も小指折るべき程になりぬ。此の處にても、此度、教師信徒の數いと多くなりにたれば、大神の御殿舍造り仕へ奉り、教會建てゝ、我が大き教の本つ神と稱へ奉り齋き奉る天理大神の分靈を齋ひ奉りて、此の新御殿に鎭め祭り、教師信徒諸仕へ奉らむと、今日を生日の足日と擇び定めて、御鎭座の御祭仕へ奉ると、奉るうづの幣帛を、安幣帛の足幣帛と、平けく安けく諸ひ聞し食して、天皇が大朝廷を、堅磐に常磐に齋ひ奉り給ひ、親王等諸王等、百官の人等、天下の百姓に至るまで、夜の守日の守に守り幸へ給ひ、此の教會に關係ふ人々をば、禍事に相まじるこる事なく、子孫の八十續、五十橿八桑枝の如く立ち榮えしめ、幸く眞幸く有らしめ給へと、恐み恐みも白す。

一一、教祖神靈鎭座祝詞

吾が教の御祖眞道彌廣言知女命の御前に、畏み畏みも白さく、八十日日は有れども、今日を生日の足日と齋ひ定めて、瑞の御殿舍に、汝命の分靈齋ひ鎭むる御祭仕へ奉らむとす。言はまくは畏かれども、

汝命此の世に生れ出で給ひて、諸人の心漸々に降ち行きつゝ、憂き瀬に落ちて歎き苦むことをし憐と見そなはして、燒太刀の敏心振り起して、人々の心の迷を、朝の風の雲霧を吹き掃ふ事の如く拂ひ清めて、大神の尊き御稜威を拜み奉らしめ給はむと、晝は終日、夜もすがらに說き諭し敎へ導き給ひければ、大神の御靈德を慕ひ奉り、恩賴を請ひ祈み奉る人々、年月に多く成りもて來て、此處彼處に敎會なも設けられぬる。此の處にも、此度新に御殿舍を設けて、敎の御祖の命の御心を心とし、大き御敎を敷き弘めむとして、今日しも神靈鎭座の御祭仕

へ奉らくを、可憐と思し召して、奉る御酒御食を始めて、海川山野の種々の物を、禮代の幣帛と聞し食し諾ひ給ひて、大き御敎を日に月に盛ならしめ給ひ、敎師信徒に嚴の御靈幸ひ給ひて、平けく安けく、敎の道に勤め勞かしめ給へと、畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

二、信徒入社式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、敎職何某愼み敬ひ恐み恐みも白さく、此度某國某郡某村大字某なる何某、大神の御靈德を仰ぎ慕ひ奉り、我が敎の

御祖の大き御教の旨を畏み奉りて、斯の道に入り立たむと請ひ祈み奉る心の切なるによりて、定れる儀式の隨、今日しも入社式を執り行ふと、禮代の幣帛捧げ奉る狀を、平けく安けく聞し食して、今日より後は、身も剛健に、心も安穩に在らしめ給ひて、大神の御稜威を畏み、教の御祖の大き御教を、違ふことなく過つことなく、守らしめ給ひ、廣き厚き大御幸を蒙らしめ給へと、恐み恐みも白す。

一三、信徒入社誓詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、己劣き身にはあれど、大神の御靈德を仰ぎ奉り慕ひ奉りて、教師某ぬしの教導に依りて、信徒の群に入立ち、今日その儀式仕へ奉り終へつれば、今より後は大き御教の隨、心を正し身を修め、家の業世の務に勤み勞き、御教の旨に露違はじと、大前に誓の詞白し奉らくを、憐と聞し食して、諸の咎過あらむをば、見直し聞き直し給ひ、世の忠實人世の幸福人とあらしめ給へと、恐み恐みも白す。

一四、信徒朝夕神拜祝詞

掛けまくも恐き、吾が大き教の本つ神と齋き奉る、

天理大神の大前を拜み奉りて白さく、大神の高き尊き御恩賴によりて、安く穩に、勤め勵み成し務む る家の業、萬の事を、日に異に進めて、諸の災なく、諸の禍事無く、家内睦び合ひて、己が向々ならしめ給はず、子孫の八十連續彌遠永に榮ゆる家とあらしめ給へと、恐み恐みも白す。

恒例祝祭の部

一五、一月一日祭祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某慎み敬ひ恐み恐みも白さく、新玉の年の初日の今日の朝日の豐榮昇に、御祭仕へ奉るとして、色變へぬ常磐の松に、千代を籠めたる吳竹を添へて挿し立て、注連縄曳き延へて、日の御旗打ち靡して、齋まはり清まはりて、捧げ奉る幣帛は、豐御酒豐御食を始めて、海川山野の種々の物、及、今日の例と、千代の若水鏡の餅に至る迄、横山なす置き足はして捧げ奉らくを、大御心もうらに、安幣帛の足幣帛と、平けく安けく聞し食して、四方の海波も穩に、日本島根の搖ぎなく、明つ御神と大八洲國知し食す天皇の大御代を、手永の大御代の茂し大御世と幸へ奉り給ひ、天津日嗣を、天地の共彌遠に彌永に立ち榮ゆ坐さし

め給ひ、親王等諸王等、百官人等、殊には信徒とある、男女、及天下の公民諸に至る迄、夜の守日の守に守り幸へ給へと、恐み恐みも白す。

一六、元始祭祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某慎み敬ひ畏みくも白さく、内日刺す都も、天放る鄙も、大神の恩頼によりて、安く穏に新しき年を迎へて、今日はしも三日の日となりぬ。故、我が教の教師信徒諸、此の正殿に參來集ひて、年毎の例のまに〳〵御祭仕へ奉るとして、稱言竟へ奉らくは、千早振る神代の昔、我が大神此の世界を造り、蒼生萬の物を生し出で給ひて、此の豐葦原の瑞穗國を、萬の國に優れたる可美國と成し幸へ給ひて、皇孫命の食國と、千代萬代に寄さし奉り給ひしまに〳〵、安國の足國と、堅磐に常磐に、神ながら天の下治め給ふが故に、大御惠に報い奉らむとして、今年も今日の生日の足日に御祭仕へ奉ると、五百枝眞榊に白幣青幣を取り垂で、うづの幣帛を横山の如く置き足し奉りて御祭仕奉らくを、平けく安けく聞し食して、皇孫命の大御稜威を、曳き延へたる注連縄の、内外の國に輝き渡らしめ給ひ、大御代を、挿しはやせる松竹

の、常磐に堅磐に守り幸へ奉り給ひ、親王等諸王等臣等百官の人等に至るまで、平けく安けく守り給ひ、吾が教徒は更なり、天下の公民をも、夜の守日の守に守り幸へ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き拔きて恐み恐みも白す。

一七、孝明天皇御祭日祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、畏み〳〵も白さく、一月卅日の今日はしも、掛けまくも畏き先の天皇孝明天皇の御祭の日にしあれば、天皇が大御門にも、後月輪東山陵の大前にも、大御祭仕へ奉り

たまふが故に、此の教會にも、後月輪東山陵の大前を遙々に拜み奉り、我が大神の大前にも、御祭の式仕へ奉るとして、御酒御饌を始めて、海川山野の種々の物を献りて、齋まはり淨まはり拜み奉る狀を、平けく安けく諸ひ聞しめして、先の天皇の大御心を受け繼がして、神ながら天の下知しめす天皇の大御代を、堅磐に常磐に齋ひ奉り幸へ奉り給ひ、我が教の教師信徒は更なり、天の下の公民を、夜の守日の守に守り惠み幸へ給へと、畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

一八、孝明天皇御陵遙拜詞

掛けまくも畏き後月輪東山陵の大前を、教職何某教師信徒等諸共に謹み敬ひ畏み〳〵も遙に拜み奉らくと申す。

一九、祈年祭祝詞

我が大き教の本つ神とます、掛けまくも畏き天理大神の大前に、慎み敬ひ畏み畏みも白さく、皇が朝廷の御式を畏み奉りて、毎年の例の隨に今日の生日の足日の朝日の豐榮登に、祈年の御祭仕へ奉るとして、御酒御食を始めて、大野原に生ふる物と、甘菜辛菜、青海原に住む物と、鰭の廣物鰭の狹物、奥つ藻葉邊つ藻葉に至る迄供へ奉りて、五百枝眞賢木に麻白木綿取垂でて、太玉串と持ち捧げ奉りて、齋知り拜み仕へ奉る狀を、平けく安けく相諾ひ聞し食して、皇孫命の遠御膳の長御膳と、赤丹の穗に聞し食さむ奥津御年を始めて、天下の公民が手肱に水沐搔き垂り、向股に泥搔き寄せて取り作らむ穀物を、惡しき風荒き水に遇はしめ給はず、八束穗の茂し穗に成し幸へ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも請ひ祈み奉らくと白す。

二〇、紀元節祝詞

我が大き教の本つ神と齋き奉る、天理大神のうづの大前に、何某恐み恐みも白さく、天皇の大御祖と坐す、神日本磐余彦天皇の、始めて畝火の橿原の大宮に天津日嗣知し食し、紀元を言壽ぎ奉り給ふ、皇が朝廷の御式に倣ひ奉りて、大神の大前に御祭仕へ奉ると爲て、持ち齋まはり持ち清まはり、御酒御食を始めて、海川山野の種々の物を百取の机に置き足はして、捧げ奉り拜み仕へ奉る狀を、平けく安けく相諾ひ聞し食して、神隨も明つ御神と、大八洲國知食す天皇の大御代を手永の大御代と、堅磐

に常磐に守り幸へ奉り給ひ、天津日嗣の御隆は、天壤の與無窮に、皇が大御稜威は彌廣に彌高に、敷き坐す島の崎々、磯の浦回に至る迄、貴きも賤きも、同じき心に、老いも若も同じ思に、業を勵み務を成しつゝ、異しき道に惑ふことなく、惡き行に交ることなく、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打ち掛けて引き寄する事の如く依さし奉りて、皇大御國の御光を、愈益に輝き渡らしめ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも白す。

二一、春季皇靈祭祝詞

秋季皇靈祭祝詞これに倣ふ

掛けまくも畏き、御代々々の天皇命の御靈の大前を遙に拜み奉りて、愼み敬ひ恐み恐みも白さく、毎年に春の御祭秋の御祭と歷代の天皇の御靈の大前を齋ひ奉り給ふ皇が朝廷の、嚴しき尊き御祭の式に倣ひ奉りて、年毎に仕へ奉る例の任に、今日しも春の御祭仕へ奉ると爲て、御酒御食海川山野の種々の物を、拆竹のとを〳〵に持ち來て、八取の机も處狹き迄置き足はして、献り、五百枝眞榊に白和幣取り垂でて、太玉串と持ち捧げ、齋知り嚴知り拜み仕へ奉る狀を、相諾ひ給ひ、此の献る幣帛を安

幣帛の足幣帛と、平けく安けく聞し食して、皇が朝廷を常磐に堅磐に守り幸へ奉り給ひ、國内平穩に人民安樂に在らしめ給へと、恐み恐みも白す。

二二、神武天皇祭日祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に畏み〳〵も白さく、四月三日の今日はしも、大和國畝傍の橿原宮に肇國知しめし〻天皇の神崩り坐し〻日にしあれば、天皇が大御門にも、畝傍の橿原の山陵の大前にも、大御祭仕へ奉りたまふが故に、此の教會にも、其の大御陵の大前を遙々に拜み奉り、我が大神の

大前にも、御祭仕へ奉るとして、御酒御饌を始めて海川山野の種々の物を捧げ奉りて、齋まはり清まはり拜み仕へ奉る狀を、平けく安けく諸ひ聞しめして、天皇が大御代を、愈遠に、愈永に、茂し大御代の足し大御代と平けく安けく、堅磐に常磐に齋ひ奉り幸へ奉り給ひ、我が教の教師信徒は更なり、天の下の人民を、夜の守日の守に守り惠み幸へ給へと、畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと申す。

一三、神武天皇御陵遙拜詞

掛けまくも畏き、畝傍の橿原山陵の大前を、教職何某、教師信徒等諸共に、謹み敬ひ畏み〳〵も遙に拜み奉らくと申す。

二四、六月大祓祝詞

十二月大祓祝詞之に倣ふ

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、我が御教の教師信徒とある男女諸が過ち犯しけむ罪事を、今年六月(十二月)晦日の夕日の降の大祓に祓ひ清むることを、相諸ひ給へと、献る御酒御食種々の幣帛を、安幣帛の足幣帛と聞し食して、今より後、おもはずも觸れむ諸の穢、ゆくりなくも犯さむ諸〳〵の罪咎を、神直毘大直毘に、見直し聞き

直し、守り幸へ給へと、恐み恐みも白す。

二五、神嘗祭日祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に畏み〳〵も白さく、十月十七日の今日はしも、伊勢國度會の五十鈴の川上に大宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて鎮り坐す、掛けまくも畏き天照皇大御神の大前に、神嘗の御祭仕へ奉らしめ給ふ日にしあれば、此の教會にも、遙々に皇大御神の大宮を拜み奉り、大神の大前にも御祭の式仕へ奉るとして、御酒御饌を始めて、海川山野の種々の物を献げ奉りて、齋

まはり淨まはり拜み奉る狀を、平けく安けく諸ひ聞しめして、神ながら天の下知しめす天皇の大御代を堅磐に常磐に齋ひ奉り幸へ奉り給ひ、我が教の教師信徒は更なり、天の下の人民を、夜の守日の守に守り惠み幸へ給へと、畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

二六、神嘗祭遙拜詞

伊勢國度會の五十鈴の川上に鎮り坐す掛けまくも畏き天照皇大御神の大前を、教職何某教師信徒等諸共に、謹み敬ひ畏み〳〵も遙に拜み奉らくと

申す。

二七、天長節祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、八十日日はあれども、今日の生日の足日はしも、明つ御神と大八洲國知し食す天皇の御生れ坐しし吉き日の重し日と、朝廷を始めて、天下國の悉神祝ぎ豊壽ぎ祝ぎ奉る御式の隨に、我が大神のうづの大前に壽詞稱へ、御祭仕へ奉るとして、御酒御食種々の物を今日の禮代と捧げ奉りて、拜み仕へ奉る狀を諾ひ聞し食して、天皇の此の大御代を知し食す事はしも、大内山の松の綠の色變へぬが如く、御溝の水の流盡きせぬが如く、彌遠に彌長に大坐し坐さしめ給ひ、大御稜威は天の壁立つ極、國の退立つ限愈廣らに敷き及ばしめ給ひて、天つ日嗣を天壤の共無窮に守り幸へ奉り給へと、恐み恐みも白す。

二八、新嘗祭祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、五の穀を始めて、天の下の百姓の作りと作る物は、大神の御靈のふゆによりて、荒き風惡し

き水の災なく垂穂八束に實り出でぬ。故、今日の生日の足日に、新嘗の御祭仕へ奉るとして、奥つ御年を荒稲和稲に奉り、御酒は瓮の上高知り瓮の腹満て雙べて、大野原に生ふる物は、甘菜辛菜、青海原に住む物は鰭の廣物鰭の狹物、奥つ藻葉邊つ藻葉に至る迄、御服は明妙照妙和妙荒妙に備へ奉りて、齋知り嚴知り、持ち齋まはり持ち清まはりて、献る幣帛を安幣帛と平けく安けく聞し食して、皇が大御代を茂し御代の足らし御代に幸へ奉り給ひ、我が教の教師信徒を、夜の守日の守に守り幸へ給へと、恐み恐みも白す。

二九、除夜祭祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、大神の廣き厚き大御心以て、夜の守日の守に守り幸へ給ふが故に、禍無く事なく、うら安くうら樂しく許多の日時送り迎へて、今日はも今年の最終と成りにたり。故、御恩の千重の一重をだに報い奉らまくと、御酒御食種々の物を捧げ奉りて拜み仕へ奉る狀を、相諾ひ聞し食して、今も往先も、いよいよますます守り給ひ幸へ給へと、恐み恐みも白す。

三〇、祓祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、今日の御祭事に仕へ奉る教師信徒、及、參來集へる諸人等が、意はずも犯しけむ罪咎、又見觸れ聞き觸れけん穢等の有らむをば、祓ひ給ひ清め給ひて御祭美しく仕へ奉らしめ給へと、恐み恐みも白す。

三一、地鎭祭祝詞

掛けまくもあやに畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、今回此の處に、大神の嚴の御靈を堅磐に常磐に齋ひ鎭め奉らむ御殿を造り仕へ奉らむと、大地の高き低きを引き平して、御柱が根の礎を、底つ岩根に築き固め、敷き並べむとして、今日の生日の足日に、御祭仕へ奉り、御酒御食種々の物を、禮代の幣帛と捧げ奉りて、拜み奉らくを、相諾ひ給ひて、雨降り風吹き、地震振り轟がむにも、此の地の搖ぎ動き壞ゐ損はるゝ事無く、千代萬代も、堅磐に常磐に守り幸へ給へと、恐み恐みも白す。

三二、立柱祭祝詞

此の處を祓ひ清めて、御祭仕へ奉る、天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、此度大神の正殿造り仕へ奉らむと、日にけに恩頼を蒙りつゝ、木匠等勤め勞きて、柱桁梁等悉に造り成し畢へつれば、今日を生日の足日と齋ひ定めて、御柱立つる式仕へ奉らくと、禮代の御酒御食海川山野の種々の物を置き足はして奉らくを、安幣帛の足幣帛と。相諾ひ聞し食して、今より後も、彌遠長に守り幸へ給ひ、瑞の正殿、禍なく事なく莊嚴に作り卒へしめ給へと、恐み恐みも白す。

三三、上棟祭祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、大神を遠永に鎮め奉り齋ひ奉らむ大正殿を造り仕へ奉る事はしも、最輕からぬ業にしあれども、大神の廣き厚き恩頼に依りて、障る事無く過つ事なく、如此麗しく作り奉りつれば、今日を生日の足日と選び定めて、上棟の御式仕へ奉るとして、新御正殿の上に、奥山の大峽小峽に茂立てる五百枝眞賢木を、さ根掘じの根掘じに掘じ取り來て、青和幣白和幣取垂で、又種々の御賀の物置き列ねて、齋まはり清まはりて、大前に、御酒御食海川山野

の種々の味物を、置き高成して奉らくを、相諸ひ給ひ、建て列れたる御柱架け渡したる梁の搖ぎなく、嚴く麗しく宮造り竟へしめ給ひて、千代萬代も平けく安けく守り幸へ給へと、恐み恐みも白す。

三四、大殿祭祝詞

掛けまくも畏き、天理大神の大前に、恐み恐みも白さく此の教會の教師諸、工匠等を率ひて、朝宵夜晝をこたることなく、勤め勞きつゝ、大神の瑞の正殿造り仕へまつらむと、奥山の大峽小峽に立てる木を齋斧以て伐り採り持ち參來て、千代萬代に動なく、大神の天の御翳日の御翳と正殿嚴く麗はしく造り竟へぬ。故、護言以て言壽ぎ鎭め白さく、大神の鎭り坐す、此の大宮地の底つ磐根の極み、高天原は靑雲の靄く極、這ふ虫飛ぶ鳥の禍なく、柱桁梁戸扉の錯ひ動き鳴ることなく、打ち堅めたる楔の緩び、取り葦ける瓦の破れ損るる事なく、常磐に堅磐に守り幸へ給ひ、大神の御稜威著く、御惠洽く、天下四方に布き弘らしめ給へと、今日の生日の足日に、御祭仕へ奉り、種々の幣帛捧げ奉りて、護の壽言仕へ奉らくを、平けく安けく聞し食せと、畏み畏みも白す。

三五、祈雨祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某慎み敬ひ恐み恐みも白さく、此頃日まれく雨降らず、旱續きて、流れ行く河水の流絶え、滿て湛へたる池水盡きて、植ゑたりし田畠の物ども萎み枯れなむとするが故に、何郡の公民諸歎き悲み、爲む便の手着を知らねば、大神の御前に御祭仕へ奉りて、奇しき尊き恩頼を乞ひ祈み奉らむと、大前に御酒御饌海川山野の種々の物を、机代に置き足はして、教師信徒等諸、大前に參集侍りて、幾日幾夜拜み祈ひ願ぎ奉らく を相諾ひ給ひ、御靈幸ひ給ひて、大空に雲立ち蔓

りて、忽に天つ水の良き雨を降らしめ給ひて、田畠潤ひ渡り、取り作る奥つ御年を始めて、蒔き生ふし植ゑ渡せる物のことく、立ち返り青み渡りて、彌榮えに榮えしめ給ひ、成し幸へ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも白す。

三六、祈晴祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、此の頃雨雲覆ひて、晝夜分かず、霖雨降り續きて、百姓等が取り作る穀物等成らず傷はれて、何縣

郡村の人々の憂ひ歎かひ、乞ひ祈み奉る事を、高き尊き廣き厚き大御心に諸ひ聞し召して、大空に立ち蔓る雨雲を科戸の風にい吹き拂ひて、天つ日影をい照り渡らしめ給ひ、百姓の作りと作る穀物を始めて、甘菜辛菜の類に至る迄成し幸へ給へと、齋まはり清まはりて御酒御食種々の幣帛を、今日の禮代と献り置きて、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも請ひ願ぎ奉らくと白す。

三七、除蝗祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく、明つ御神と大八洲國知し食す天皇の、撫で給ひ惠み給ふ百姓が、手肱に水沫掻き垂り、向股に泥掻き寄せて、取り作れる穀物を、這ふ虫の化り出でて、食ひ枯し食み盡さむと爲る狀を慨み歎きて、今日しも某縣郡町村何の人等大前に參來集ひて、御祭仕へ奉り乞ひ祈み白さくと、御酒御食を始めて、海川山野の種々の物を置き足はして献り、拜み仕へ奉らくを、平けく安けく聞し食し諸ひ給ひて、速けく此の害を拂ひ除き給ひ、天皇の遠御膳の長御膳と聞し食さむ奥つ御年を始めて、百姓の作りと

作る物どもは、草の片葉に至る迄成し幸へ給へと、恐み恐みも乞ひ願ぎ奉らくと白す。

三八、除疫祝詞

掛けまくも畏き、天理大神の大前を拜みまつりて、恐み恐みも白さく、此の頃某縣郡町村に疫病多に起りて、公民等が病み臥しあつかひ惱みて、醫師禁厭のわざも效なく、死ぬる者多く出で來ぬれば、諸人等憂ひ歎きて、爲む便の手着を知らに、今は大神の大御幸を乞ひ祈み奉らむ外はあらじと、今日しも大前に參來て、御祭仕へ奉り、御酒御食種々の物を置き足はして、一向に拜み請ひ願ぎ奉らくを諸ひ聞し召して、大神の奇しく妙なる大御稜威以て、公民諸が煩ひ惱む禍事をば、科戸の風の朝の御霧夕の御霧を吹き拂ふ事の如く、掃ひ退け給ひて、病しき事なく、煩しき事なく惠み幸へ給へと、恐み恐みも白す。

三九、道路開鑿起工式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、大神の恩賴によりて、蒼生の彌益に殖りて、國々處々の月毎に開け、年毎に榮ゆる隨に、人の

往來も愈々繁くなりぬれば、今度、我が教の信徒等議り定めて、某の里より某の里に至る迄、馬に車に往き通ふ大道を作り開かむとして、今日の生日の足日に、事始の御祭仕へ奉ると、御酒御食を始めて、海川山野の種々の物を、禮代の幣帛と置き足はして、齋知り嚴知り拜み仕へ奉らくを、平けく安けく聞し食し諸ひ給ひて、此の業に勤み勞く人々諸に、過つ事無く障る事無く、速けく事成し竟へしめ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも請ひ願ぎ奉らくと白す。

四〇、道路開通式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、姓名恐み恐みも白さく、大神の廣き厚き恩賴に依りて、某の處に至る迄、過つ事なく障る事無く新墾の道作り畢へぬれば、今日を生日の足日と選び定めて、大前に御祭仕へ奉りて、道路開通の式執り行ふと、御酒御食海川山野の種々の物を置き高成して、禮代の幣帛と捧げ奉らくを平らけく安らけく聞し食し諸ひ給ひて、此の新道を、雨にも風にも崩ゆることなく損はるゝことなく、常磐に堅磐に守り幸へ給ひ、往來ふ諸人を、禍なく事なく、夜の守日の守

に守り惠み幸へ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも白す。

四一、架橋起工式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白さく、是の何川はしも、遠近の高山短山より落ち激ち流るゝ水の出で合ふ所にして、霖雨降る時は人のうち渡るべくもあらず、將、船泛けて濟らむ便も有られば、此度我が道の信徒等思ひ起して、大橋の高橋を架け渡さむと、諸人に議らひ、官に請ひ得て、今日を生日の足日と選び定めて事始めむと、關れる人々寄り集ひて、御祭仕へ奉ると、御酒御食海川山野の種々の物を置き足らはして献り、齋知り嚴知り、拜み仕へ奉らくを相諾ひ給ひて、夜の守日の守に守り幸へ給ひ緩み怠る事無く、諸人の心足らひに、速けく架け渡し造り畢へしめ給へと、恐み恐みも白す。

四二、架橋落成式祝詞

此の齋場に忌竹刺し立て、注連縄曳き延へ、神籬立てて、齋まはりて清まはりて、招き奉り坐せ奉る、掛けまくも畏き天理大神の大前に、何某恐み恐みも白

さく、此の何川の大橋作ると、先に大神に請ひ願ぎ奉りて、晝はも日の盡、夜はも夜の盡、緩み怠らず、彌進み、に進み彌締りに締りて、今架け渡し造り竟へたる此の大橋の高橋を何橋と名附けて、今日の生日の足日に渡始の式行ふと、諸人等此の處に參來集ひて、大神の高く尊き恩賴によりて、此の橋の堅く美しく成り終れることを忝み奉りて、御祭仕へ奉り、御酒御食種々の味物を、八取の机に置き高成して献らくを、平けく安けく聞し食し諾ひ給ひて、雨降り水溢るとも、風吹き地震搖るとも、此の橋の落つる事なく損はるゝ事なく、彌遠に彌長に、彼方此方の諸人が渡らむ隨に、守りたまひ幸へ給へと、恐み恐みも白す。

四三、開校祝祭式祝詞

此の齋場に神籬立てゝ、招き奉り坐せ奉る掛けまくもあやに畏き天理大神の大前に、何某謹み敬ひ畏み〳〵も白さく、白銀にも黃金にも玉にも優りて美しきものは人の心の光になもあるを、現身の人と生れ出でゝ、此の心の光しなくば、なか〳〵に石瓦にも同じくて、たま〳〵大神の御靈賜りて人と生れ出でたる詮もなかるべし。是を以て、畏きや、

我が天皇貴き大御掟を下し給ひて、大御國の内悉に學校を建てしめ給ひ、種々の學びの業を習ひて、心を研ぎ智を開かしめ給ふが故に、教育の業彌進みに進み、教化彌廣まりに廣まり行くまに〳〵、此度此の處にも此く嚴く廣く麗しき學舍造りて、何學校としも稱へて、今日を生日の足日と選び定めて、開校式執り行ふとして、御祭仕へ奉り、御酒御食種々の幣帛を捧げ奉りて拜み奉らくを、平けく安けく相諸ひ聞し食して、今より始めて、此の學舍に來集ふ兒等が學の道を違ふることなく、教の則を過つことなく、枉事に相率り相口會ふことなく、一

日は一日毎に、白銀にも黄金にも玉にも優りて、美しき貴き心の光を增さしめ給ひ、正しき智を開き得て、世の爲國の爲に盡さむ誠の人と成らしめ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて恐み〳〵も白す。

四四、祈旅行安全祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に恐み恐みも願ぎ白さく、何某今日を生日の足日と選び定めて、遠き旅路に出で立たむとして、首途の壽言壽ぎ回し、大前に御酒御食種々の物を奉りて乞ひ願ぎ奉ら

くを相諾ひ給ひて、今日出で立ち行かむ道の隈々、行き惱み行き煩ふ事なく、宿らむ驛に、はてむ泊に、枉つ日の枉事なく、夜の守日の守に守り幸へ給ひ、平けく安けく事成し竟へて、恙なく立ち歸らしめ給へと、恐み恐みも乞ひ祈み奉らくと白す。

四五、祈海上安全祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく、何某今日を生日の足日と選び定めて、某の港より、某丸といふ大船に打ち乘りて、某の國某の港にい往き渡らむとす。故、大前に參來て御酒御食種々の味物を置座に置き足はして献り、齋知り嚴知り拜み奉り祈み奉らくを相諾ひ給ひて、荒き波風立たしめ給はず、過ぎ往かむ早瀬に、船寄せむ浦わに、禍なく事なく、潮の八百路も只一筋に平けく安けく往き渡り事成し竟へて、恙なく返らしめ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き貫きて、恐み恐みも乞ひ祈み奉らくと白す。

四六、祈漁獵祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく、姓名等が家の業と、此の浦回に網子調へて、奥

つ波邊つ波凌ぎ、棹檝の及ばむ限り、船の舳の到り留る極み、い漕ぎもとほり、い往き回らひ、海の幸獲むと、大神の廣き厚き恩頼を仰ぎ奉りつゝ船出爲らくを相諾ひ給ひ、献る御酒御食種々の物を、安幣帛の足幣帛と、平けく安けく聞し食して、荒き波風の禍無く、海幸多に請の隨に獲しめ給へと、恐み恐みも白す。

四七、諸祈願報賽祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に恐み恐みも白さく、先に大神の恩頼を乞ひ祈み奉りつるに、大神等嚴の御靈幸ひ給ひしによりて、此度何々の事を恙無く成し終へつれば、嬉み辱み奉りて、今日しも報賽の禮代と、御酒御食種々の物を置座に置き足はして献り、齋知り嚴知り拜み奉らくを、相諾ひ給ひ、平けく安けく聞し食せと、恐み恐みも白す。

四八、誕生式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、畏み〳〵も白さく、大神の神慮の隨、何某の長男子（或は二男、又は長女或は二女等）今日の生日の足日に、うつそみの世に安けく生れ出でぬ。故此の狀を告げ奉りて、今

より後、大神の奇しく尊き恩頼を仰ぎ奉らむと、御酒御食種々の物を献りて、齋まはり清まはり拜み仕へ奉る狀を、平けく安けく諸ひ聞し食して、此の男子(或は女子)の生先安く守り幸へ給ひて、すくすくと成長らしめ給へと、恐み恐みも白す。

四九、命名式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、大神の恩頼によりて生れ出でたる何某が眞名子を某と名づけつれば、その狀告げ奉らくを聞し食し諾ひ給ひて、彌々益々、惠み給ひ慈み給ひて、某が身に禍つ日の禍事なく、病しき事なく、煩しき事なく、幸く眞幸く、皇御國の忠實なる御民と生ひ立たしめ給へと、御酒御食種々の物を献りて、乞ひ祈み奉らくを、平けく安けく聞し食せと恐みくも白す。

五〇、初詣祝詞

掛けまくも畏き天理大神のうづの大前に、恐み恐みも白さく、何某の眞名子某今年某月某日、大神の恩頼によりて安けく生れ出でたる事を、家人等嬉しみ奉り辱み奉りて、今日を生日の足日と某を、抱

きて、大前に參出でて、拜み奉らくを諸ひ給ひて、某が身を、彌遠に彌長に、天皇の大御寶と愛で慈み給ひ、禍つ日の禍事なく、夜の守日の守に守り幸へ給ひて、成長りて後は、家の爲御國の爲めにいみじき功を立てしめ給へと、恐み恐みも請ひ願ぎ奉らくと白す。

五一、成年式祝詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、何某い大神の廣き厚き恩賴を蒙りつゝ、稚く劣かりし身の、禍無く事無く、壯に健き人と成りて、今はしも、新玉の年の二十年を重ねて、大君の醜の御楯と出で立つべき齡となりぬ。故、其の祝ぎ言申し奉らくと御祭仕へ奉る狀を相諸ひ給ひて、禮代と献る御酒御食種々の幣帛を、安幣帛の足幣帛と、平けく安けく聞し食して、今より後も、彌遠に彌長に守り幸へ給ひ、世の長人世の遠人と、幸く眞幸く在らしめ給ひて、皇國の御民とある務を盡さしめ給へと恐み恐みも白す。

五二、婚姻式祝詞

掛けまくもあやに畏き天理大神の大前に恐み恐

みも白さく、何某はも、大神の廣き厚き恩頼を被り
つゝ、此度何某か女何子を娶り、今日を生日の足日
と選び定めて、大神の御前に婚姻の式を執り行ふ
として、松竹梅に、翁嫗及鶴亀の形などつくり備へ、
御酒御食種々の物を、禮代の幣帛と献り置きて、拜
み仕へ奉る狀を、平けく安けく聞し食し諸ひ給ひ
て、夫婦の中間は松の綠のごとことはに睦び親み、く
れ竹の操正しく、咲く梅の世に香しき譽を得て、翁
嫗の齡をかさね、鶴亀の千代萬代も變らふことな
く、幸く眞幸く守り幸へ給へと、恐み恐みも白す。

葬祭靈祭の部

五三、遷靈詞

あはれ、某の君や、惜しくも死亡り坐しぬるかも。悲
しくも死亡り坐しぬるかも。親族家族諸〳〵歎かひ悲
みつゝも、御遺骸を柩に歛めて、今し遷靈の式仕へ
奉らむとすることを諸ひ聞し食して、汝が命の靈
此の靈璽に遷りまして、平けく安けく留りいませ
と申す。

五四、鎭靈詞

何某の君の靈の前に白さく、今汝が命の靈を此の

小床に齋ひ鎭め奉りて、御祭仕へ奉らくと、献る種々の物を平けく安けく聞し食して、今より後遠永に家人が心盡して齋き仕へ奉らむとする狀を見そなはし諾ひ坐せと白す。

五五、發葬詞

何某君の柩の前に姓名謹みて白さく君はも御性質直く正しく忠實に坐して、身を修め家を齊へ給ひしは言ふも更なり、國の爲道の爲に、身をも心をも盡し給ひければ、親族家族朋友を始めて、總べて相識れる人の限、百年も千歲も坐せと祈りつつ在り來しを、去にし某年某月の初旬(或は中旬又は下旬)の頃より御心地例ならずして病み臥しつつい坐しけるに、今年今月の某日齡何十何歲といふを此の世の限として、逝く水の還らぬが如く、入る月の影消ゆるが如く、隱り逝きましゝは惜しとも惜しく悲しとも悲しき極になもありける。然れば殯室の任にてだに、長く久しく仕へ奉らま欲しく思へども、現世の慣として然あるべくもあられば、甚惜しき遺骸を棺に歛め、輿に舁き載せて、葬の式仕へ奉らくと、御酒御食種々の物を献らくを、平けく安けく聞し食せと白す。此く聞し食してば、御前に

立ちて導き奉り御後に隨ひて御供仕へ奉るまに
まに、千代の住所と定め奉れる御墓所に、平かに安
かに出で立ち給へと、謹みて白す。

五六、誄　辭

何某君の柩の前に謹み敬ひて白さく、あはれ、汝が
命はや、某年某月某日某の君の眞名子と生れ出で
て、齡何歳の時、鄕の小學校に入り給ひしを始にて、
何歳のとき何學校の學の業を卒へ、かくて、家の業
を繼ぎ、何町村の某氏の女何子を妻として、男幾人、
女何人を生み坐しき。素より慈愛深く、眞心厚く、善

く親に事へましゝかば、家の内和び睦びつゝ、其の
名も世に聞ゆ、人にも重く用ゐられしからに、公共
の事業にも心を盡されし事多なりき。かくて、何年
何月長男某の君に家督を讓りて、身安く心樂しく
世を過し座しけるを、現身はすべなきものか、去に
し何年何月の頃より、心地例ならず病み坐しけれ
ば、親族家族打ち集ひて、醫藥の術を盡し、我が大神
にも乞ひ祈み奉りつゝ、茜さす晝はひれもす、ぬば
玉の夜もすがらに看護らひて、もとの如く壯健に
坐さしめむと、心を盡せるに、御壽の限にや坐しけ
む、今年今月何日、齡何歳といふを此の世の限とし

て、行きて返らぬ旅路に出で立たしつるこそ、悲しとも悲しく、惜しとも惜しき極みにはありけれ。故、親族家族諸涙にかき暮れつゝ、顯世の例のまに〳〵、遺骸を柩に歛めて、在りし世を偲びつゝ仕へ奉れるを、さてしもあるべきにあらねば葬の儀執り行ふと、親族家族諸柩を護らひ、御供仕へ奉り來て、今此の處に舁き居ゑて、御酒御饌種々の物を、御前に置き足らはして、終の御祭仕へ奉り、露けき袖をかき拂ひて、謹みて誄辭を聞に奉らくと白す。

五七、埋葬詞

何某の君の柩の前に申さく、只今御葬の式仕へ奉ると、親族家族諸人等柩の後に立ち並み續きて、安く穩に送り奉り來て、此くの狀に仕へ奉らくを、平らかに安らかに聞しめせと申す。あはれ現身の人の世の狀は、はかなきものと知りつれど、昨日に變る今日の態を見れば、悲しとも悲しき限にこそ。汝が命が現し世に坐しゝ時は、世の事家の業に勤め勞き給ひ、親族家族を慈み、人の交さへ疎かならず坐しければ、相交れる人、相語らへる人皆は、いかで、世の遠人長人と坐しませとのみ願へるを、忽に朝露の如、夕露の如、はかなく身まかり坐しつるは、言

はむすべ爲むすべ知らに、今更に夢の如くになむ。あはれ、悲しきかも。あはれ悔しきかも。しかはあれど、現身の人の齡は、總べて天つ神の御慮と定まれるものにしあれば、例のまに〳〵柩を造り、遺骸を搔き擧げて、清けき白妙の衣着せ奉り、御柩に和祢褥を敷きて其が上に坐せ、年頃愛で給ひし種々の物を取り添へ、厚衾さし覆ひ、柩に斂めて出で立たせる路の儀裝は、最先に白旗赤旗立て列れ、五百枝の眞榊に白幣青幣取り垂でて、持ち捧げ、吹き鳴す笛の調亂なく送り奉り來て、此の奥つ城所に御柩は埋め鎭め奉らむとす。故、此の狀を諾ひ給ひて、我

我が天理大神の御靈德を思ひ賴みて、百足らず八十の隈手を、惑ふことなく猶豫ふことなく、唯一筋に安く穩に幽界にい行き到り坐して、正しき神の列に入り、現世の親族家族諸々をば、幸く眞幸く遠永に守り幸へ給ひ、年毎の御祭美しく仕へ奉らしめ給ひ、汝が遺體は、平らかに安らかに永久に某の岡の邊の奥つ城所に鎭り坐せと、終の御饗の御酒御饌種々の物を供へ奉りて、謹み敬ひて申す。

附言。火葬のときは、終より十行前の「……送り奉り來て」より下を改めて「種々の御饗の物を供へて御祭仕へ奉り、汝が命の空しき遺骸は、迦具土の

御稜威のまに〳〵治め奉らむとす。故此くの狀を諾ひ給ひて、我が天理大神の御靈德を思ひ賴みて汝が靈は、百足らず八十の隈手を惑ふことなく猶豫ふことなく、唯一筋に、安く穩に幽界に い行き到り坐して、正しき神の列に入り、現世の親族家族諸をば、幸く眞幸く遠永に守り幸へ給ひ、年毎の御祭美しく仕へ奉らしめ給ひ、汝が遺骸は空しき烟と立ち騰りたまふとも、遺骨は設け定めたる何の岡邊の奥つ城所に、平らかに安からに永久に鎭り坐せと、謹み敬ひて白す」と改むべし。

五八、葬後靈祭詞

此の小床に齋ひ奉る何某君の靈の前に白さく、前に告げ奉りし事の如く、埋葬式を今しも恙なく畢へつれば、靈祭仕へ奉らくとして、奉る種々の物を平けく安けく聞し食して、遠つ御祖親族家族等の靈と共に、遠永に鎭り坐して、家門廣く、子孫安く立ち榮えしめ給へと、乞ひ祈み奉らくと白す。

五九、十日祭詞

二十日祭詞之に倣ふ

此の小床を拂ひ清めて坐せ奉り齋ひ奉る何某君の靈の前に白さく、あはれ、葬儀仕へ奉りしは、只昨

日の如き心地するを、過ぎ行く日時は暫しも止らずして、今日はも十日と云ふ日に成りぬ。故、親族家族を始めて、人々諸御前に參集ひて靈祭の式仕へ奉らくと、捧げ奉る種々の物を、御心も靜けく、御思も安けく聞し食して、禍なく事なく親族家族諸を守り幸へ給ひ、家門廣く立ち榮にしめ給ひて、時々の御祭美しく仕へ奉らしめ給へと、敬ひ拜みて白す。

六〇、五十日祭詞

百日祭詞之に倣ふ

此の靈屋に齋ひ奉る何某君の靈の前に白さく、汝が命の此の世を去り給ひしより、指折り數ふれば、早くも今日は五十日(百日)とぞなりにたる。故親族家族を始めて、人々諸相集ひて、御祭仕へ奉り御靈を慰め奉らむとして、御酒御饌を始めて、時の菓、山野の物をも献げ奉らくを、平けく安けく聞し食して、親族家族諸に至る迄、禍日の禍事に相率り相口會ふ事なく、病しき事なく、煩しき事なく、家の産業を彌進めに進め、家の基を彌固めに固め、子孫の八十續末遠永に立ち榮にしめ給へと、謹み敬ひて白す。

何某の君の靈の前に白さく、君はも去年の今月の今日の日に、此の世を去りて、幽界へ出で立ち給ひつれば、親族家族は世の永人遠人と思ひ賴みたりし望も空しくなりて、ひたすら歎かひ悲むが中に、月日は射るが如く來經行きて、早くも一年の今日の御祭仕へ奉る日とぞ成りにたる。君と相語らひし人々は、今斯く在れども、君が俤は見ねず。君が慈み給ひし子等は、此の席に侍れども、君か姿は在らず。あはれ、悲しきかも。あはれ悔しきかも。然はあれども、出で立たしし現し身の返り來ますべくもあらねば、今、かくの狀に御祭仕へ奉り靈を慰め奉るとして、海川山野の種々の物供へ奉らくを、平けく安けく聞し食して、此の家内を夜の守日の守に守り幸へ給ひ、子孫の八十續き、伊賀志八桑枝の知く立ち榮にしめ給へと、謹み敬ひて申す。

六二、五年祭詞

十年祭詞之に倣ふ

此の靈舍に坐せ奉り齋ひ奉る、何某の君の靈の前に白さく、今日五年（十年）の靈祭仕へ奉ると、親族家族又親しき人々相集ひて、御酒御食種々の物を御前に供へ奉らくを、甘らに聞し食し諾ひ給ひて、此の家内に諸の禍事なく、幸く眞幸く彌榮に榮ゆ

る門と在らしめ給ひ、子孫の八十續伊賀志八桑枝の如くあらしめ給へと、何某慎み敬ひて白す。

六三、改祭詞

此の家の世々の御祖の靈の前に、何某慎み敬ひて白さく、此の大御國は遠皇祖の神の御代より萬の事神隨に行ばれ來て、直く正しかりしを、中つ世になりて、古の風漸々に衰へ、祭の式葬の儀さへ外國風に率りにたり。明けく治る此の大御代には、萬の事古に立ち返り、我が教の道も眞澄の鏡まさやかになり來ぬれば、此の家主何某はも我が大神の御陰を仰ぎ奉り、我が御教の旨に從ひ奉りて、今回御祖等の祭の式をも改めむとして、御前に事の山を告げ奉らくを、御心も穩に相諾ひ給ひて、今より後遠永に此の家の御守神と坐しまして、親族家族諸を禍なく事なく守り幸へ給へと、御酒御食御水堅鹽種々の物を献りて、慎み敬ひて白す。

六四、遠祖祭詞

此の靈屋に坐します遠つ祖世々の御祖の靈の前に、慎み敬ひて白さく、今日御祭仕へ奉ると、海川山野の種々の物を、献らくを、平けく安けく聞し食し

て、此の家内に禍つ日の禍事なく、家の業は、日にけに榮に年々に盛ならしめ、子孫の八十續き、彌遠に、彌永に御祭美しく仕へ奉らしめ給へと、何某親族家族諸〳〵に代りて、謹み敬ひて白す。

六五、信徒諸靈合祀祭詞

此の小床を、嚴の眞屋と齋ひ定めて、信徒諸〳〵の靈を招き奉り坐せ奉りて、何某愼み敬ひて白さく、あはれ、汝が神靈等はも、最も貴き我が大神の恩賴に依りて、現世には各幸多かる身と坐しまし、斯かれば、今汝が靈等を大神の御殿の内に招き齋ひ奉らむと、今日此く狀に御祭仕へ奉り、御酒は甕の上へ高知り甕の腹滿て並べ、御食は高杯の彌高成して供へ奉り、大海原に住む物、大野原に生ふる物、種々の物を置き足はして奉らくを、平けく安けく、相嘗に甘らに聞し食し諸ひ給ひて、汝が靈等の親族家族が家にも身にも諸〳〵の禍事なく、夜の守日の守に守り幸へ給ひ、又斯の教を彌廣に彌遠に布き弘らし め給ひ、御志を繼ぎて信徒の群に入り立つ人々を、日に月に彌益〳〵に多からしめ給へと、乞ひ祈み奉らくと白す。

六六、信徒合靈祭詞

此の小床に鎭り坐す信徒諸の神靈の前に、何某慎み敬ひて白さく、今日を八十日日が中の善き日と定めて、汝が神靈等の御祭仕へ奉るとして、奉る物は、御酒御食甘菜辛菜、鰭の廣物鰭の狹物、奥つ藻葉邊つ藻葉、御水堅鹽に至るまで、横山の如く供へ奉らくを、平けく安けく聞し食し諾ひ給ひて、汝が靈等の親族家族の家内に、諸の禍事なく、安く穩に守り給ひ、又、此の御教の道を、彌廣に彌遠に布き弘ごらしめ給ひ、信徒の數彌益に多からしめ給へと、慎み敬ひて白す。

天理教祝詞集 終

改訂

天理教祝詞集附錄

一、秋季大祭祝詞

明治廿九年十一月卅日

秋津洲大和國は、國柄も八十國に勝りて、秀國の美國なり、足曳の山邊郡三枝の三島乃里は、里乃中にも吉き地の可美地なりと齋ひ定めて、此の神床を仕へ奉りて、鎭め奉り坐せ奉れる、掛けまくも綾に畏き天理大神の大前に、神道天理教會長權大教正中山新治郎忌まはり清まはり、畏み畏みも白さく、十餘一月の月は、千町田に植ゑし晩稻も苅り收めて、公民の暇出で來、野山の木々は薄く濃く匂ひ出でゝ、最も樂しく最もめでたき時と、年毎の恒例の

まに〳〵秋季の大御祭仕奉らくと、奥山の眞榊を根掘じに掘じ來て、二所に植ゑ建て、明妙照妙の五色の絹を右左に取り垂でて、奉る由紀の御食、鏡の餅、御酒は甕の上高知り、甕の腹滿て並べて、大野原に生ふる物は、甘菜辛菜を始めて種々の物、青海原に住む物は鰭の廣物鰭の狹物、大海の原に生ふる物は廣和布若和布の奥つ藻葉邊つ藻葉、時じくの香菓、御水、堅鹽に至る迄、禮代の御饗物と、八取の机に置き高成して、樂人ら笛吹き鳴し、皷打ちつゝ奉る幣帛を、安幣帛の足幣帛と、平けく聞し食して、天つ日嗣の高御座に、顯つ御神と大八洲國知しめす

皇御孫尊の大御世を、手長の大御世と、堅石に常石に、嚴し御世の足し御世に幸へ奉り給ひ、皇子等諸王等を始めて、仕へ奉る百の官人等、天の下の公民に至る迄、五十檀八桑枝の如く立ち榮にしめ給ひ、今日の御祭仕へ奉る教導職の人々、又此の齋庭に參來集ひて、大神の御稜威を仰ぎ奉り、恩賴を乞ひ祈み奉る信徒等百千々の中には、慮はぬ罪穢有らむをば咎め給ふことなく、神直日大直日に、見直し聞き直し給ひて、夜の守日の守に守り給ひ幸へ給へと、鹿じもの膝折り伏せ、鵜じもの頸根突き拔き

二、御教祖改葬申告祭詞　明治廿五年十二月十三日

久方の天理教會の教祖と持ち齎き仰ぎ奉る、眞道彌廣言知女命の御墓の御前に白さく、言はまくは畏かれど、汝か命の此の世を去り坐し丶頃は、良き奥つ城所も未設けずてありければ、心ならずも、當時の慣習のまに〳〵、爲む方もなく此の所に葬り奉れるは、飽かず口惜く、年まれく一日も忘る丶間なく、歎き慨みて有り經しを、時期の來にければにや、入紐の同じ心の人々、此所彼所と、善き地を覓ぎつ丶今縣廳の允許を得て、此の地より北の方程遠からぬ、五百稲の豊田山なる、夕附日西の森を千代の御奥つ城と齋ひ定めて、底つ磐根に石垣築き固め、四方四隅に瑞垣結ひ回して、今日しも改葬の儀式仕へ奉らむとすることを、甘らに聞しめし諸ひ座せと、御酒御饌種々の物を備へ奉りて、恐み恐みも白す。

三、御教祖改葬新御墓地祭詞

玉鉾の眞道彌廣言知女命の御前に、御末奴らま中教正中山新治郎慎み敬ひ畏み畏みも白さく、畏き教祖とます吾が言知女命は、今より百足らず九十餘五年の昔、此の國此の郡、一筋心ゆるぎなき

三昧田の底さへ清き前川の家に生れ出でまし、其の性温しく樸にして、人と爭ひ物に逆ふ心露ばりも無く、目に度り耳に觸るゝ事は聊も忘れ給はず、身を修むること嚴かに、親に事ふること忠やかに、同胞を愛しむことといと厚く、家の業を怠らず、女の手業にも老け給ひて、夙くより世の人の鏡とぞましましし。文化の七年のとしに、吾が大父に嫁ぎ給ひてよりは、舅姑に事ふることと生の親に異なることなく、夫を扶けて貧き人を救ひ、便無きものを恤み、夫亡なりし時は、殆盲にもならむまでに泣き悲み給ひき。それより後は、專神を敬ひかしづき、善き

事を人に勸めて芳しき名遠き國々へも聞にゆく並に、畏き神の御教を蒙りまし、遂にこの天理教會を事始め給ひき。かくて、とさまかくさまに此の道の榮にんことを圖りつゝ、所々に出で向ひて、人々を教へ導き、數回憂き瀬に落ち、苦き境に臨みながら、更に撓み屈み給ふことなく、古も稀なりと云ふ、七十の年にまた廿年の齡を加へて、今より六年の夕ち方、に現世の事いそしみ卒へて、天神の御許に復命申し給へる一生涯の高き嚴しき御功は、今更に稱へ奉らんもなかく〳〵に愚なりとぞ申すべき。此くばかり尊き教祖の奥つ城所も、當時は事の惑

に良き墓所覓ぎ設くる暇もなくて、世々の親たちの御墓の側に葬し奉りき。此はしも、新治郎を始めて、吾が徒誰も誰も皆飽かず口惜しき事の限りと、歎き慨みたりしを、あはれ〳〵時の行ければ、此の道に心を寄せ、この教に従ふ善き人の忠なる人日にけに殖え増り、教會の本部をも作り建て、新治郎汝が命の遺し給へる教を彌益々に四方に布き施らしつゝ、信徒の數百萬の上をあまた踰え、教職六千人に満ち、大き小き教會所も百六十餘を設け得たり。こは皆教祖とます汝が命の御功ぞと仰ぐにつけて、いかで〳〵奥つ城所を改め築き、其が御功

功に相稱ふべき、嚴しき御墓となさまくと、よりよりに人々諸〳〵とあひはかり相勤みつゝ、縣廳の許を得て、武夫の手にとりならす梓弓引豐田なる、西の森の尾上の清く廣く美しき所を、千代萬代に虧けず崩れぬ奥つ城所と撰び定めて、今日しも改め葬し奉りぬ。是を以て新治郎は更なり、信徒の人々が年月の願始めて成り、汝が命の御心も必ず善び諾ひ給はむと、嬉しく覺ゆるまゝに、此の御祭鄭重に壯嚴に仕へ奉るとして、御酒御饌、鰭の廣物鰭の狹物、奥つ藻葉邊つ藻葉の類より、種々の珍かなる品どもを御前に横山の如く打ち積み置きて奉り、又

其の道に老けたる人々の言の葉をも乞ひ集めて手向け奉らくを、平けく安けく聞し食して、彌益々に此の道を守り幸へ給へと畏み畏みも申す。

四、大婚滿二十五年奉祝祭祝詞

明治廿七年三月九日

掛けまくも畏き天理大神の大前に、權大教正中山新治郎愼み敬ひ畏み畏みも白さく、言はまくは恐かれども、現つ御神と大八洲國知し食す倭根子天皇の、天の下の政事は、獨知らすべき物ならず、必ず後の政事有るべしと宣り賜ひ勅せ賜ひて、皇后宮を立て賜ひ定め賜ひてより、天に日月の在る如く、地に山川の在る如く並び坐して、茂し大御世の足し大御世と、天の下の公民諸を撫で賜ひ治め賜ふ年月累り積りて、今年の春は、二十年餘り五年の御祝典の式年に成りぬれば、御園の梅の花も時知り顏に色香彌勝り、塢を出づる鶯も聲を改めて萬歲を謠ふなるべし。況してや、教導職に列れる者は、三月の九日の今日の日を、生日の足日の吉日と、大前に持ち齋まはり持ち清まはりて、御祝典の御祭仕へ奉らくと、奉る幣帛は、由紀の御食、御酒は甕の上へ高知り、甕の腹滿て並べて、鰭の廣物鰭の狹物、沖つ藻菜邊つ藻菜、甘菜辛菜を始めて、種々の味物を机

代に置き高成して奉る幣帛を、安幣帛の足幣帛と、平けく聞しめして、天皇及皇后宮の大御壽命を、千代に八千代に、小礫石の巖と成りて苔の生す迄、常磐に堅磐に守り給ひ幸へ奉り給へと、開手を亮々に拍ち上げて、畏み畏みも白す。

五、征清軍戰勝祈禱祭詞

掛けまくも畏き天理大神の大前に、神道天理教會長權大教正中山新治郎慎み敬ひ畏み畏みも白さく、言はまくは恐かれども、現つ御神と大八洲國知し看す、大倭根子天皇は天の下の大き義を根本と

し給ひ、萬國公法の條々を守り給ひて、世間穩に、民草幸かれと思し願ぎ給ひて、弱き韓國を扶け、强きに誇る他し醜國を挫きて、天の下の公の道を明にし、仇は防ぎ、蔑する者は懲して、韓國を天の下に獨立たしめんと、大御使を立てゝ勸め誘ひ給へるを、言轉ぐ支那の國王は、其の國の廣きに傲り、其の民の多きを賴みて、負氣無くも、我が日の御旗に對ひて不禮き業を爲、そゞろに我が軍艦に大筒小筒を打ち懸けて、戰を挑みければ、我が天皇は甚く怒り給ひて、直に戰開く大詔を下し給ひて、速に千萬の軍人を徵し給ひ、集め給ひて、彼の國へ遣し給ひけ

れば、軍人等高き卑しきをいはず、諸共に同じ心に猛き雄々しき大和心を振り起して、額には矢は立つとも、背には立たじと揚言しつゝ、勇みに勇み健びて攻め戰へば、向ふ所に敵無きが如く、攻むれば取り、戰へば捷ちて、人無き境に入る如く、海原の軍旅は、鹽の八百路の白浪を蹴破りて、黑煙立つる軍艦は渤海灣深く進み入り、陸地の軍團は、山風の秋の木の葉を吹き掃ふ事の如く、奉天府近く進みければ、遂には其の都とある北京の城も日ならずして打ち破れ、攻め落されぬべく成りなむとする事は、全く天皇の大御稜威と、我が皇神等の恩賴とに

依る事と、たしに窺ひ奉り嬉み奉りてはあれど、尙今も行く先も、軍人等諸を彌益々に幸へ給ひ、守り給ひて、其の勢も其の精神も强くあらしめ給ひて、思ひの儘に捷を得しめ給ひ、彌益々に、皇國の威光を海の外の遠き國々迄照り赫かしめ給へと、請ひ祈み奉る事の由を聞しめし諸ひ坐せと、奉る禮代の幣帛ば、御食御酒を始めて、海川山野の種々の物に至る迄、机代に置き足はして、畏み畏みも白す。

六、神道管長子爵稻葉正邦卿柩前祭詞 明治三十

一年七月十九日青山墓所において神道一般部下教師を代表

空蟬の世のはかなきは、今更にもあられど、おのれ

教師等がをぢなき身を導き、行手の闇をてらしつゝ、惟神の道の教づかさと坐し、汝命と別れまつる悲しさは何にかたとへむ。ぬば玉の闇路に迷ふおのれらはしも、今よりは誰をかあふぎ、誰にかしたがひて教をこひまつらむ。今は、おほけなくも汝命の御事業をたゝへまつりしぬびまつりて、せめては、おのれらがこのなげきの千重の一重をも申しまつらむ。そも汝命はしも、弓矢執るたふとき家に生れ給ひて、今の大御代の初つ方までは、淀城の主とまして、公の事は更にもいはず、下々の事にもつばらに御心を用ゐ給ひしかば、昔にもまして内

外の譽いと高かりき。ことに、おほかたのうま人は、奢にたけ、遊に耽りて、學のわざにいそしむことなどはいと罕なるためしなるを、汝命は、夙く平田鐵胤の翁の門に入りて、御國まなびすと、朝な夕な自ら翁の許に通ひ給ひて、あだし弟子の群に入り立ちつゝ、ひるげなどみづから携へ給ひきとぞ。この一事にすら、汝命がよのつねの貴人にあらざりしことをうかがひまつるべくなむ。かくてこの御國學び給へる御心はしも、いちはやく御事業の上にあらはれ、大御代の前つ方よりは、君の爲國の爲、醜の御楯となりて盡し給ひし御功績は、今はた數ふ

る暇もあらず。明治の元年朝廷の神祇官を置き給ひしをりは、何くれとなく力を盡し給ひ、教部省を置き給ひては、こゝにも仕へ給ひて、明治五年に教正に補され給ひぬ。これよりいやつぎ〳〵に教職の級も昇り給ひ、世の望もいよよ重くなりゆき給へるが、なべての世の事情は日に日にがはりゆきて、教職の人々もかにかくに移り變りしが、汝命が斯道に盡し給ふ御心は、始にもまさりて、いやます〳〵深かりき。されば明治の十七年、神道の管長に仰がれまして、永き月日を、かはることなく、おこたることなく、今はの際まで、この事にのみ、ひたすら

御心を傾け給へり。今こゝにまをさむは禮なきわざにはあれど、この世のためしと、時に盛衰あり。折々はさがなき毀譽を受け給ひしことあれど、飽くまでも道の爲とて、御心を動し給ふことだになく、いよゝ鋭心ふりおこして、進みにすゝみ給へる雄々しさは、いまはた稱へまつる辭もあらずなむ。かゝる御心おきては、世の禍事もたちまじらふべくもなく、皇神の教は年々にひろごりゆきて、教導職の數は四萬餘になり、教をうけしともがらは三百七十萬餘にもなりて、麻布の神岳に、下つ岩根に宮柱築きたて、天つ御空に御甍高く瑞の御殿を建て

給ひき。かくて移り住み給ひし、玉くしげ箱根の山は世の塵を離れたれど、朝夕に都の空をのぞみ、遠近の世のさまをも見給ひつゝ、教のことにのみ御心を傾け給ひて、月の夕花の晨によみいで給ふみやび言すらも、みなこの御心により給はぬはなかりき。あはれ世のさまの常なきは何事ぞや。言はまくは畏かれど神風の伊勢の神宮に迦具都智の災起りしをいたく恐ぢかしこみ給ひ、大内にいそぎまゐのぼりて、雲の上の御けしきを伺ひ給ひしが、この日より御心地例ならず、御病の床に打ち臥したまひしは、顯つ御神に永き世のなごり奏しま

しいにぞありける。あはれ、この日より病院にさへ入らぜ給ひしが、照りはたゝく水無月の空にも、附き添ふ人の心づくしにおほかたは癒ゆ給はむさまなりければ教徒幾百萬の人々も皆よろこびあへるに、俄におどろかれぬることゝなれりしは、くやしともかなしともいはんすべ知らず。今は汝命も神の御許に、いゆきまして、まさしき神の列にも入り給へれば、このなげきをあはれとも見そなはして、この教のわざに御靈幸ひ給ひ、おのれらをぢなき身をたすけ給ひて、斯の道をしきひろごらしめ給へと、神道教師及信徒總代大教正中山新治郎

謹みゐやまひて誄詞まをし奉らくとまをす。

七、管長養父母廿年祭詞 明治三十三年三月二十七日

此の靈屋を嚴の眞屋と、掻き鳴す六つの緒琴のすがゝしく掃ひ清めて八十日日は有れども、今年三月の廿日餘り七日の日を生日の足日と擇び定めて、親族家族又教徒ら諸參來集ひて、負氣無くも此の中山の家を承け繼げる新治郎、持ち忌まはり持ち清まはりて、今日の齋主と嚴矛本末傾けず、湯津眞榮木を嚴玉串と持ち擎げて、父母二柱の命の御前に、愼み敬ひ畏み畏みも稱言竟へ奉らくと白す。言はまくは恐かれども、己れ新治郎い、幼き頃より、中山の家の養子と定めらゐ、齡十餘り二にして此所に移り住みければ、學問の道は更なり、萬の事等總べての物等、皆父母二人の導き給ひ諭し給ひ示し給ひし恩賴に依りて成長りき。此くの狀を御心に愛しく悅び給ひ嬉み給へと白す。あはれ、今過ぎにし往昔べを思ひ出でゝ、偲び奉り言擧するは、中々に惶く悲しき事ながら、ちゝの實の父命はや、惜らしき現世を脊向に成して、百足らず八十の垣路に隱り給ひし年月を、指折り讀み數ふれば、十年は只短夜の夢の間に過ぎ行きて、春風に氷解け渡

る谷川の水の白浪、早く流れて返らぬ事の如く、今年は二十年とぞ回り來にたる。又柞葉の母の命は、や、汝が命の此の世を身罷り坐しゝは、二年三年と思ふ間に、隙行く駒の八街を甚疾く馳する事の如く、十年餘り九年に成りぬるを、二十年と數へ成し、御祭仕へ奉るに附けても、二人の命は左有りけり右有りけりと、或は春花の咲き匂ふ朝の庭に打ち向ひ、或は空澄み渡る秋の夜の月を眺め遣りて、戀ひ奉り慕ひ奉るもはか無く便無く、只昔を忍ぶ涙の種とぞ成りにたる。故、禮代物と供へ奉る御食御酒を始めて、海川山野の種々の物を甘らに安らに聞し食して、御前に參來集へる人々の往先を幸く守り給へ、扶け給へと、畏み畏みも稱言竟へ奉らくと白す。

八、贈大教正飯降大人誄辭

明治四十年六月十五日

言へば息衝かしきかも。思へば悲しきかも。贈大教正飯降大人はや。汝が命い、御性質朴直にして行狀清廉く、常住も穩當しく坐しましゝが、御齡若かりし頃より、我が教への道に入り立ちて、深く心に尊信び、篤く身に履行ひ給ひき。又信徒らをば最懇切に導き諭し給ひて、牙ゐ渡る冬の日も怠り給ふこと

無く、照り輝く夏の日も倦み給ふ色見えず、忠實く教導の業に勤め勞き給ひしかば、人々皆其の面向けに依り順ひ打ち靡きて、天つ水仰ぎ尊み、大船の思ひ頼みつゝ、年月久に過ぎ來にたるを、空蟬の世は思ふが儘にも得あらで、吉き事に凶事い次ぎつゝ、汝が命は今年二月の頃より病の床に臥し給ひぬ。然はあれども素より身體健全に坐せば速に癒え給ひて、常の如、教導の業に就き給はんとのみ思へりけるに、思の外に倏忽に其の容體變りて、短夜の窓の燈火、朝の風に消えて、跡無く、子規布留の山べに鳴く聲絶えて、歸らぬ道に入り給ひぬるは、

悲しとも悲しく、悔しとも悔しき極みにこそ。故、信徒ら諸爲む術の手着を知らず、愁ひ歎けども、今は其のかひ無ければ、御葬儀の式嚴重に執り行はむと、葦垣の間近き里は更にも言はず、雲居なす遠き境よりも、人々諸集ひ參來て、御柩に從ひ奉り、道の八十隈畏み慎み送り奉りて、今し奥つ城の奥深く埋め奉り藏し奉らむと、白妙の袖に五月雨の雨と降る涙搔き拂ひ、雲霧と立ち重る歎息の眞中に、一言の誄辭聞え奉らくを、聞しめし諾ひ坐せと、教師諸に代りて權中教正松村吉太郎慎み敬ひて白す。

九、卅七八年戰役戰病死者吊慰祭詞

明治三十九年四月二十二日

此の處を祭の場と齋ひ定めて、神籬さし立てゝ、明治三十七八年の戰役に身罷り給へる軍人等の嚴の御靈を招き奉り坐せ奉りて、天理教會長大教正中山新治郎教師諸を率ひて、愼み敬ひて白さく、掛けまくは畏かれども、我が天皇は久方の天つ日嗣知し食し、大御代の初より廣き厚き大御心以て、海の外の國々に交らひ、たまひ、一向に親み睦びたまひしを、ゆくりなくも露西亞の國との論事起りにければ、かにかくに大御心を惱したまひ、度まれく談り判めしめ給ひけるに、其の効なくて終には龍の潛む東洋に風吹き荒れて、大和島根に仇波來寄せ、鷲が住む西比利亞の空に叢雲閉ぢて、我が日本の國の光も搔き消たれぬべく成り來にしかば、今はかくて有るべくもあらずと、燒太刀の鋭き大御心を振り起し給ひ、世界の平和を保ちて、皇國の安穩からむことを計るには、兵の力に藉らずてはと思し成り給ひ、彼の國と戰を開き給はむ大詔を降して、大御軍を出で發たしめ給ひにき。故、軍人等は、其の大詔を戴き持ちて、嚴の雄詰び踏み健び、額に矢は立つとも、背には矢は立てじと言立てゝ、戰場

に行き向ひ、大海の原八重の潮路に船出しては、逆巻き荒るゝ大浪小浪凌ぎ渡らひ、大野の原千里の道に出で立ちては、險阻しき山の石根木根踏みさくみて、只進みに進み、い照り耀く夏の日は、燒くる沙に汗の雫を滴らせ、冱に渡る冬の夜は、氷の床に雪を枕としつゝも、撓む事なく萎むことなく、各も〈受け持てる職掌を守りて、其の程々に勤み勞き、敵に打ち對ひては、千萬の雷なす砲の響、雨と降り來る彈丸の繁きを事ともせず、旗薄穂波並み立つ劍の林、千引石取り重れたる堡壘の山を物ともせず、君を思ひ國に報いむ日本心の一筋に、側目もせずて、進み戰ひければ、嚴しく築き構へたりし敵の大城は忽ち打ち破られ、數繁く連並み來し彼の軍艦は、大海の底のいくりと擊ち沈められ、大御旗の向ふ極み、大き陸の草も木も靡き伏し、御軍艦の進む限り、大洋の波も穩に靜りにたり。斯く軍人等の勉め勵みて、甚じき功績を立てつるが中に、汝が命等はも、敵が痛手を身に負ひて、野山の末に空しき軀を横へ、海河の底に骸を沈め、或は日頃の勞苦の積に重き病を得て、草枕旅寢の床に可惜命を殞し給ひにき。今し戰役終りて、軍人等は凱旋擧げて、山青く水清き此の玉垣の内つ御國に歸り來て、國

民の、萬歳呼ふ聲々に歡び迎へられ、花笑ひ鳥歌ふなる長閑けき己が家庭に入り立ちて、父母妻子等に見え、兄弟朋友に會ひたる喜は言はむも更なり、人々の心盡しの數々に、過ぎにし勞苦を忘れ、盡せぬ軍物語に、菅の根の長き春日を心樂しく暮すなるを、汝が命等が、草葉の露消えて跡無く、沖つ浪往きて歸らず成り給ひにし事の惜しさよ。あはれ、天地の神に請ひ祈みつゝ、幸く眞幸きくて歸り來坐せと待ちい坐しけむ親族家族の人等の心は如何ばかりならむと、思ひ遣るだに哀しさの極みにな も。然は有れども、大御軍の戰ふとして勝たざる事

無く、攻むるとして取らざる事なく、遂に能く戰を開き給ひし大詔の旨を成さしめ奉り、平和なりし昔の狀に世を復して、皇國の威勢は彌益々に加りつゝ、外國人も仰ぎ畏み、囀るや韓國さへに服從ひて、むくさかに榮え行く大御代と成り來にたるは、專ら天地の神の御幸と、八隅知し我が天皇の大御稜威とに依れる物から、一には、醜の御楯と出で立たしし、軍人等の忠に雄々しくて、殊に、汝が命等が魂極命の限り盡し給ひてし御功績の甚じかりし故にこそ。かゝれば、汝が命等は、豫ての御志の如、身をば草生す屍水漬く屍と爲し給ひつれども、高き

御功績は天の下に著く芳しく、名譽は世に聞こえて、皇御國の榮ゑむ極み、長く久しく語り繼ぎ、行かれなむ。故、徒に嘆かひ哀まむは、益荒雄の心に有らず、汝が命等の御志にも有らじと、今は一向に其の御功績を仰ぎ奉り、其の名譽を慕ひ奉りて、八重霞棚引く山に、櫻花匂ふ盛りの今月の今日を、生日の足日と撰び定めて、御祭仕へ奉るとして、第四師團の將校等近き府縣の官人等貴顯等を招き、此の縣の内なる遺族の人等をも集へて、我が教への教師諸祭場にうずすまり居て、御酒御食を始て、海川山野の種々の珍物を供へ奉り、五百枝眞榊に木綿取り垂

で太玉串と持ち捧げ、樂人等に、笛吹き皷擊ち歌ひ舞はしめて、御靈を慰め奉らくを、御心も穩に、平けく安けく聞し食せと申す。斯く聞し食してば、今より後は、皇國の永き御守神と成りて、生も死も同じ思に、顯世も幽世も、一つ心に靈幸ひ給ひて、常磐に皇國を守り給ひ、仇なす者の有らむには、速けく伐ち誅め逐ひ却けて、皇國の威勢は、谷蟆のさ渡る極み、船の舳の到り留る限り、天つ風四方の草木を押し靡かすが如くい行き渡らしめ給ひ、皇御國の御光は、青雲の靄く極み、白雲の向伏す限り、天つ日の内外の國に隈無きが如くい照り徹らしめ給ひ、

又、汝が命等の親族家族の悉、子孫の末々をも守り幸へ給、ひ御志を受け繼ぎて、身の程々に皇御國に盡さむ人と有らしめ給へと、謹み敬ひて拜み申さくを、汝が命等の奇魂幸魂、天翔り國翔りても聞し食せと白す。

一〇、本教獨立奉告祭祝詞

明治四十二年二月十九日

此の假殿を嚴の眞屋と齋ひ定めて、齋き奉り坐せ奉る、掛けまくも綾に畏き天理大神のうづの大前に、天理教管長勳六等中山新治郎愼み敬ひ畏み畏みも白さく、大神の奇しく妙なる大御議もて、此の

豐葦原の瑞穗國は、萬の國に優りて、事物の足らへる國と成し幸へ給ひて、皇御孫尊の萬千秋の長秋に天の下知しめさむ御食國と定め給ひにしまに〳〵、皇御國は神の道明かに、人の心朴直に、行正しくて、神ながら言擧せぬ美し御國とあり來しを、三栗の中つ御代より、外つ國の道參渡り來て、事わざ複雜く成りもて行きつゝ、人の心はかにかくに移ろひて、誠少なき狀となり、石の上古き風を忘れて、有らぬ方さまに彷徨ひ入る人々も多に起りて、禍津日のすさびに、久方の天つ日影の雲霧に覆はるることの如く、大神の大御稜威も暫し隱ろひ、大朝

廷の御威勢も振はぬ御代としもなりにたりき。されど、天つ日は、いかで再び世を照し坐さざるべき。大神の大御稜威によりて、我が教への祖の命は大神の御形代と、皇國の國の中區の、此の大和國に生れ出でゝ、身は手弱女ながらに、廣く大きなる惠を心に湛へて、世の人を教へ導かむと思し立ちたりき。然はあれども、頑固なる者等は、或は嘲り誹り、或は惡み妬みて、種々に妨げ害ひつるを、我が教への祖の命はしも、燒太刀の利心振り起し、身もたな知らに勤め勞き、憂きに堪へ、辛きを忍びつゝ、年頃を重れて緩みおこたることなく、遂に此の大きなる御教

を起し立てゝ、大神の恩寵を世に普く施し給ひければ、野羽玉の暗路を辿れるが如く愁ひ迷ひつゝ、己が心と、憂き瀬に落ちて惱み苦めりし世の人々は、天地の眞の理を悟りて、人とある道を明め、思ひ釀せる罪穢を祓ひ清めて、安く樂しき神の境を得認むる事とはなりぬ。かくて、御教を仰ぎ慕ひて此の道に入り立つ徒月々年々に多くなり增りて、教師の數幾萬、信徒の數幾百萬と、小指折るべき程になり教會所も國内到らぬ隈なく、外つ國にさへ設けらるゝに至れり。故、初めの間は神道本局に管れられて有り經にしを、かくては御教を布むに便あ

しければ、そが下を離れて、獨世に立たむ教派とならまくと思ひ起して、豫てより官廳に願ひ出で、猶此の道の栞にと、教典を定め、將來の教師を養ひ成さむと、學校を設け、現在の教師の爲に講習會を創め又教則を作りて教會の事務を整へ理めしから、道の光は彌益々に明かになりにければ、官廳にも其が樣を見感で給ひて去年の十一月の廿日餘り七日の日、獨立つべき教派として許し給ひぬ。かく茲に年普く思ひ渡り願ひ望みたりし志を成し、得つるは、只管に大神の深く厚き大御恩に依る事と嬉しみ奉り辱み奉りて、今年の今月の今日を生

日の足日と撰び定めて、其の狀を告げ奉らくと、年頃、一つ心に此の道に勞ける教師諸を率ひて、大前に種々の珍物を横山なす供へ奉りて、齋はり清まはり畏みく も御祭仕へ奉らくを、めぐし愛しと見そなはし感で給ひ諾ひ給ひて、教の祖命の趾を履み、志を繼ぎて、彌益々に布き弘めむと思ひ定めたる此の正道を、谷蟆のさ渡る極み、舟の舳の到り留まる限りい行き通らしめ給ひて、天地萬の物を神ながら主宰り坐す大神の大御威德を、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、遺つる事無く、たしにい行き及ばしめ給ひ、此の御國を御食國と、常

磐堅磐に、敷き坐せる天皇の大御仁德を、青雲の靄く極み、白雲の墜り坐向伏す限り、天の下四方の國といふ國、悉くに行き亘らしめ給ひ、此の世界をば靈幸ふ神の御國の、綾に綾に轉樂しき處と成らしめ給へと、春日野に神の使はす小男鹿の、膝折り伏せ、吉野川御饌の御贄と魚捉る鵜の、頸根突き拔き、畏み畏みも拜み奉らくと白す。

一一、假敎殿鍬始式祝詞 明治四十三年五月二十八日

掛けまくも畏き天理大神の大前に、恐み恐みも白さく、此度木工伊藤滿作に課せて、大神の假敎殿を、今日の生日の足日に造り初めむとす。かく容易からぬ事は、我が大神の廣き厚き御惠によりてし、平けく安らけく功成し畢へむと思ひ議りて、恐み恐みも大神の大前に乞ひ祈み奉らくを諸ひ聞しめして、今日より日々に勞き務むる木工の道に御靈幸ひ給ひて、思慮深く緩み怠る事なく、勤め歎まし給ひ、打つ墨繩の法のまに〳〵、違ふ事無く過つ事なく、速く功卒へしめ給へと、恐み恐みも白す。

一二、管長病氣平癒奉謝祭祝詞 明治四十四年九月二十七日

掛けまくも畏き天理大神の大前に、權大敎正松村

吉太郎畏み畏みも白さく、去年の春、我が御教の管長中山新治郎い、ゆくりなく重き病に罹りて、日にけにあつしく成り行きつゝ、世に聞えたる醫師等心を盡してつくろひつれど、人の命は一つのみこそあれ、二つありとも三つありとも、足るまじとなもいふなる。こゝを以て、我が教の教師信徒等もろ〳〵歎かひ慨みて、夜としいはず、晝としいはず、一向に我が大神に乞ひ祈み奉る心の誠を、めぐしかなしと覧そなはし御靈幸ひ坐すがまに〳〵、今年の春の頃より、醫師さへも見驚き聞き驚く迄に、一日は一日より癒えまさりて、今はしも、全く諸人も

心落ち居るばかりに成りにたれば、あやに畏き我が大神の恩頼を、喜び奉り嬉しみ奉りて、國々の教職等諸々、月並の御祭に次ひて、今日しも大神の大前に參集侍りて、喜び申しの御祭仕へ奉らくと、献る幣帛は、御酒御饌を始めて、海川山野の種々の物を、横山の如く置き高成して献らくを、平けく安らけく諸ひ聞し食して、今より後、中山新治郎が身に、禍つ日の禍事あらしめ給はず、夜の守り日の守りに守り惠み幸へ給ひ、我が教の道を彌益に榮えしめ給へと、齋知り嚴知り畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

一三、大教殿新築起工式祝詞

明治四十四年十月二十七日

掛けまくも畏き天理大神の大前に、畏み〳〵も白さく、大神の御稜威月々に加り、歳々に添ひ行きつゝ、天の下四方の國は更なり、我が教は外つ國にも敷き及びて、斯の道に入り立つ者、今は大凡五百萬人を數へ、大き小き教會も凡三千といふ數に成りなむとす。故、年の内に月を選び、月の内に日を選びて、今年の秋の大き御祭にさし次ぎて、今日を生日の足日と齋ひ定めて、先つ年相議りしまに〳〵、大神の瑞の大教殿を、神ながら敷き給ひ定め給へる本つ大場に、新に造り仕へ奉り、又、教祖の命の御殿、教

師信徒等の靈鎭むる殿は更にも言はず、教廳をも、管長の家居をも、一つ御垣の内に造り始むとして、國々の教職等諸、大神の大前に參集侍りて、御酒、御饌、海川山野の種々の物を献りて事の由を告げ奉らくを、平らけく安らけく諸ひ聞し召して、敷き坐す此の御垣内を、撞き固むる底つ磐根の極み、動く事なく搖ぐ事なく、堅磐に常磐に齋ひ護り給ひ、木匠、石匠、手人等諸が今日より始むる事業は、打つ墨縄の法違ふ事なく、手斧鋸執る手も確に過つ事なく、總べて與り仕へ奉る人々を、行く末かけて、禍なく事なく守り幸へ給ひ、一つ心に勵み勤み締らし

め給ひ、豫て思ひ設けたる議のまに〳〵、年月違へず、瑞の大御殿を始めて、御殿家居の高知る甍高く嚴く麗しく造り仕へ奉り畢へしめ給へと、齋まはり清まはり、畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

一四、同工事長奏上祝詞

掛けまくも畏き、天理大神の大前に畏み〳〵も白さく、今回天理教廳の御依しに依りて、大神の大殿を始めて、教祖殿祖靈殿は更なり、教廳及管長の家居をも新に造り奉らんとす。こは世にも例多からぬ業にして、拙き怯き己等が身に得あふまじき事にしあれば、一向に大神の御惠を乞ひ奉りて、清き誠の心一條に、木匠等もろ〳〵を率ゐて、一つ心に力を恊せて、撓まず怠らず其の務に勞き勤まむとす。掛けまくも畏き大神、某等が思はずも過ち犯しけん罪咎あらんを、廣き篤き大御心に、見直し聞き直し給ひ、御稜威愈高に、御靈賜ひて、己等に咎過無く、定めの年月過たず、嚴く麗しく事成し遂げしめ給ひ、功あらしめ給へと、畏み〳〵も乞ひ祈み奉らくと白す。

改訂
天理教祝詞集
終

271
48

明治四十五年六月一日印刷
明治四十五年六月五日發行

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八拾番地
編纂者　道友社編輯部
發行者　右代表者　增野正兵衛

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地
印刷者　濱田正夫

大阪市南區安堂寺橋西詰南へ入
印刷所　濱田日報社

特 18
623

改訂 天理教祝詞集

国立国会図書館

014456-000-0

特18-623

天理教祝詞集（改訂）

道友社編輯部／編

M45

ABB-0834